

気格抜群の後藤光侶（廉乗）の

みつとも

作品が生まれた文化的土壌

— 光侶「枝菊図」小柄 —

伊藤 三平

はじめに

今回は後藤家十代光侶（廉乗）の作風と、同時に朝廷の絵所預職として活躍した土佐光起の画風の類似性に着目して、本阿彌光悦、俵屋宗達などが活躍した京都寛永文化の残滓が残る時代の美意識を探りたい。金工として代を重ねている名門の後藤家も十代廉乗になると、話題に上らない。絵画の方で代を重ねて有名なのは狩野派であるが、江戸時代には土佐派の画家も存在した。ともに取り上げられることの少ない金工と画工だが、後水尾天皇を中心とする洗練された品の良い朝廷文化を体现した芸術家である。

1. 枝菊図小柄

この作品は『刀装金工 後藤家十七代』（島田

貞良、富士繁雄、関戸健吾著）に所載されている。周りの地板は、赤銅（銅に少量の金を混ぜた合金で黒色を呈す）を用いる後藤家には珍しい四十分一（銅に銀を混ぜた合金で、銀の含有量で色合いは変化するが、この小柄は銀の割合が低い）の魚子地であり、黒の色調が薄い。そこに後藤家特有の見事な漆黒の赤銅（金の含有量が多い）で菊の枝葉を高彫で据えて黒の階調差を出している。菊花と蕾は金銀の色絵で表現し、枝葉は後藤家の掟として見られるように露を銀で置き、葉には虫食い跡を彫っている。二輪の菊花は少し楕円に型どり、その一輪の花弁は金から銀へ移るような金色絵で表現している。また右上の蕾の金色はくすんだような金を使っている。逆に左に伸びた咲きかけた菊の蕾は鮮やかな金と、金色にも変化を付けている。品の良さに感動する作品である。



2. 後藤光侶廉乗

（1）経歴

後藤家十代廉乗は、八代即乗の子として、寛永5（1628）年に京都に生まれる。父の即乗が4歳時に逝去した為に、その後継に宗家九代を預かった理兵衛家の程乗に養育・技術指導を受け、正保2（1645）年の18歳時に宗家の通称四郎兵衛を名乗り、承応元（1652）年の25歳時に宗家十代目を相続する。明暦2（1656）年の29歳時に江戸に呼ばれ、32歳時に程乗とともに金分銅吹替の命を受ける。そして寛文2（1662）年の35歳時に江戸定府（江戸を本拠地）を命じられる。前代の後藤家当主も時に呼ばれて江戸で仕事をしたが、江戸定府は光侶からである。天和3（1683）年の56歳時に法体となり廉乗となる。この時、子の乗賢光嘉が四郎兵衛となるが、貞享元（1684）年に惜しいことに25歳で逝去し、分家仙乗家から光寿（通乗）を養子とする。そして元禄10（1697）年に70歳で隠居し、家督を通乗に譲り、宝永5（1708）年に81歳で没する。この枝菊図小柄は光侶銘であり、1645～1682年（18歳～55歳）の作品であるが、銘ぶりの変遷の研究は進んでおらず、これ以上のことは不明である。



(2) 光侶廉乗の作風と評価

後藤家の作品も十代となると話題に上らない。近年の刀装具の書物では、活躍時期が長いので作品は多いが、精巧な作と並出来のものの差が大きい程度のコメントや、外形的な評（「画面一杯に図柄を彫りつける傾向がある」「図柄の肉取りが比較的に低いものが多い」「割合に濃密で手間をかけた彫法」「鑿使いは多少荒っぽい傾向がある」など）が見られる程度である。

江戸期の『装剣奇賞』（稻葉通龍著）において作風を具体的に記した箇所では「おとなしく大様なる所あり」（おだやかでゆったりと落ち着きがある）とある。『金工鑑定秘訣』（野田敬明著）では「気格抜群にして面白く、見所ある作なり」とある。『広辞苑』で「気格」をひくと「品格、気品」のことで、品格とは「①物のよしあしの程度。しながら。②品位。気品」で、そして気品とは「どこことなく感じられる上品さ。けだかい品位」とある。

この作品を観ていると野田敬明の説く「気格抜群」を実感する。

3. 土佐光起の作品との類似性

この小柄で目を惹くのは中央の二輪の菊花が円形ではなく、やや楕円になっていることと、菊花の花弁の一部の色金を変えていることである。

この点に関して、この絵の影響ではないかと気



が付いたのは、土佐光起の作品を観た時である。

（右図…「布袋・松に鶴・菊に鶉図」より菊花部分を切り取る。大阪市立美術館「近世やまと絵の開花・和のエレガンス」特別陳列土佐光起生誕400年」より。原画は個人蔵）

この絵では菊花の花形は楕円に、白い菊の花芯部分は黄色く描かれている。楕円は視点が意識された現実的描写で、花芯の黄色は雄しべの実写と思われるが、光起には他に同様の菊花を描いた作品がいくつもあり、光侶は土佐光起の絵画作品を参考にしたと考えられる。

4. 土佐光起

土佐光起は元和3（1617）年～元禄4（1

691）年の生涯で、江戸時代の土佐派を代表する絵師である。和泉国堺出身で、父の土佐光則に従って寛永11（1634）年18歳で京都に移り、承応3（1654）年38歳で従五位下・左近衛将監に叙任されるが、この時に永禄12年（1569年）に土佐光元が戦死以来失われた朝廷の絵所預職に85年ぶりに復帰したと考えられる。後水尾天皇の覚えがめでたく、自邸に絵所の称号を勅許され、「勅許画院」の印章を用いる。延宝9（1681）年に光成に絵所預の職を譲り法橋となり、その後法眼（本来は僧位だが仏師や絵師、医師などにも与えられる名誉称号）となり、元禄4（1691）年に享年75歳で没する。従来の温雅な大和絵に、克明な写生描法（特に南宋の画家の「鶉図」を細密描法で描き、光起の鶉の絵が真に迫る姿なので猫が飛びかかったという伝承も残されている）を取り入れた。画題の面でも、風俗画や草木図などそれまで土佐派が描かなかった題材を取り上げ、清新な貴族趣味的な画風を作り出し、土佐派の再興に成功した。

5. 後藤光侶と土佐光起と 同時代の京都の文化

後藤光侶は前述したように寛永5(1628)年の誕生から江戸定府を命じられた寛文2(1662)年の35歳まで、時に江戸に呼ばれることはあったが京都を拠点に活動している。土佐光起が堺から京都に拠点を移したのは寛永11(1634)年18歳以降であり、朝廷の絵所預職に任じられた承応3(1654)年38歳時には、光侶は27歳である。

廉乗が光侶銘を名乗った18歳時の正保2(1645)年から江戸に移り住む35歳時の寛文2(1662)年は、土佐光起の29歳、46歳に該当する。この二人が共に活躍していた時代の京都では、桃山時代の香りも残す京都寛永文化人の本阿彌光悦は寛永14(1637)年、松花堂昭乗は寛永16(1639)年、角倉素庵は寛永9(1632)年に逝去(俵屋宗達は生没年不明)しており、小堀遠州も正保4(1647)年に69歳で逝去している。しかし譲位したものの後水尾天皇と東福門院和子が存命で、桂離宮も造営中であり、寛永文化とも称される貴族的、かつ古典的な美の追求を特徴とする文化は発展していた。総合芸術でもある茶道では小堀遠州(主観的な侘び寂びを季節感も取り入れて客観的に、そして和風にして「綺麗寂」と称せられる)の次ぎの金森宗和(明暦3(1657)年73歳で没)の茶道(柔らかく明るく優美・上品で「姫宗和」とも称せられる)が京の公家たちに愛されていた。宗和は陶工の野々村仁清(金彩、

銀彩を交えた色絵で華麗な絵画的装飾を施した茶器を製造)も見出している。この時代に生まれたのが「枝菊図」小柄である。

なお、江戸では狩野探幽(慶長7(1602)延宝2(1674)年)が瀟洒端麗と称される画風を展開している。穏やかで品の良い作風は共通するが、土佐光起は菊という草花を画題にしたように優美さが強く出ている。

6. 菊栽培ブーム

画題になった菊についても触れておきたい。菊は平安時代から愛好され、重陽の節句(9月9日)は菊の節句とも言われ、菊花を浮かべた酒を飲んで長寿を願う風習が続いていた。鎌倉時代は後鳥羽上皇が菊花を愛好し、皇室の紋となり、御番鍛冶とともに自ら製作に携わった太刀には菊花文を茎に刻んでおり、その太刀は菊御作として愛好家に高く評価されている。

江戸時代になると園芸文化は盛んになり、徳川秀忠の椿の愛好は知られているが、草花では菊が、この小柄が生まれた時期あたりから京都で愛好家が増え、正徳年間(1711~1716)に菊の栽培方法などを記す専門誌が多数刊行され、これらの集大成として『花壇菊花大全』(養寿軒雲峰著)が享保2年(1717)の跋(本文の末尾に編集者・出版者等が記す文)で刊行されている(「日本における菊栽培の伝統と菊細工」劉洋

著、国士舘大学学術情報リポジトリ)。
この小柄は菊を愛好した武士、公家、名字帯刀の上層町人の注文ではなからうか。

おわりに

後藤家の刀装具は「上三代」「上六代」(それぞれ初代から三代、初代から六代の作品を指し、高く評価)、「祐光頭」「祐光即」「祐光通」(それぞれ初代祐乗、四代光乗に加えて七代頭乗、あるいは八代即乗、十一代通乗を入れて高評価)が話題に上るが、十代廉乗光侶の作品における「気格抜群」(どこことなく感じられる上品さ、気高い品位がずば抜けていること)を再認識してもらいたい。